

保育士養成校学生の食にかかわる意識調査 — 保育者との比較を通して —

入 江 慶 太

A Survey of the Consciousness of Eating in Early Childhood Care and Education Course Students

— A Comparison with Nursery School Teacher —

Keita IRIE

キーワード：食，意識調査，生活技術，保育士養成

概 要

本研究の目的は、学生の食に関する意識の実態をとらえ、保育者に求められる「食に関する生活技術」について、学生と保育者の間に何らかの関係性があるかということを探索的に分析することである。調査と分析の結果、次の3点が明らかとなった。(1)保育者に求められる「食に関する生活技術」についての調査によって明らかとなった食についての意識は、「保育者」と「学生（1年生・2年生）」との間でズレがあること。(2)「保育者」は、子どもに対する具体的な食に関する外的行動の意識を重要視していること。(3)「学生（1年生・2年生）」は、食にかかわる自分自身の知識や資質といった内的側面を重視する傾向があること、である。

以上のことから、今後の学生への指導内容検討の方向性として、子どもに対する保育者の具体的な食に関する働きかけといった、外的行動の側面を学生に意識させていくことが重要であることが示唆された。

1. 緒 言

近年、子どもを取り巻く食環境が大きく変化し、様々な問題が顕在化してきている。家族が共に食事をする機会の減少に伴う「孤食」の増加、家族が食卓を共にしながらも、別々の料理を食べる「個食」の問題、時間がない・食欲がない等の理由による「朝食抜き」などである。また、子どもの周りには様々な食品があふれ、一見食生活が豊かになったかのように感じるが、それが子どもの食生活の真の豊かさにつながらず、逆にそのことによる食生活の変化が子どもの健康に悪影響を及ぼしている¹⁾。

こうした子どもの食環境の問題を考えたとき、健全な食生活習慣を形成していくべき乳幼児期は非常に重要な時期であると言える。乳幼児期の食の営みは、乳幼児の健全な成長・発達に欠くことのできない行為で

あり、生涯の健康づくりの基礎となるからである。さらに、多くの乳幼児期の子どもが過ごす保育園や幼稚園といった集団保育の場における、子どもへの食にかかわる働きかけがますます重要になってきていると言えよう。

近年、国レベルでも「食」についての重要性が指摘され、平成16年には「保育所における食育に関する指針」の通知、平成17年には「食育基本法」の施行が行われ、平成18年3月には向こう5年間を対象とした「食育推進基本計画」が策定された。また、平成20年3月に告示された「幼稚園教育要領」²⁾、「保育所保育指針」³⁾においても、食に関する新たな改訂が書き加えられている。特にこの「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」の改訂では、子ども自身に積極的に食を営む能力を身に付けさせるために、保育現場や保育者がリーダーシップを取り、以前にも増して子どもや保護者に対して食の大切さなどを伝えることや、子どもに適切な食習慣が身に付くよう指導する能力が保育者には求められる。

実際の保育現場では、上述のように保育者が子ども

(平成20年10月15日受理)

川崎医療短期大学 医療保育科

Department of Nursing Childcare, Kawasaki College of Allied Health Professions

へ食に関する指導を行う以前に、子どもは保育者の所作をモデルとしながらお茶碗を持ったり、食べ方を真似したりする姿が多く観察される。つまり、保育者自身のより良い食行動が子どもに与える影響は、非常に大きいものと推察される。このことを保育士を目指す学生に当てはめた場合、学生自身が食に対する意識や行動を振り返り、食に関する必要な知識や技能を身につけ、将来子どもに指導をしていくだけの能力を身につける必要があるということに他ならない。

一方で、実習先や保育現場の保育者からは、実習生の生活経験の乏しさ、生活技術の未熟さについての指摘を受けることも多い。具体的には「夏に収穫される野菜を知らない」「箸の持ち方が正しくない」「配膳したものの配置がおかしい」など、食に関する知識はおろか、本来家庭の養育の場で身につけておくべき食に関する基本的技能も備わっていない学生の現状が伺える。

そこで、本研究では、保育者に求められる「食に関する生活技術」について学生と保育者の間に何らかの関係性があるかということについて探索的に研究することとした。そして、将来保育者となる学生が自らの食行動や意識を見直し、積極的に改善に取り組み、必要な生活技術を身に付ける機会を作るとともに、学習の成果が十分に発揮されるための指導内容作成の一助とすることを目的とした。

2. 研究方法

1) 調査対象者、調査アンケートおよび調査時期

調査対象者は、中国地方にある私立短期大学の保育士を目指す学生132名（1年生64名、2年生68名）である。調査者が作成したアンケート用紙は、学生が「保育者に求められる食についての生活技術」について、箇条書きを含む自由記述の形式で記入した。また、調

査の実施にあたり、目的、集計及び活用方法、活用に当たって遵守すべき注意点について調査対象者に十分説明し、調査に合意して参加してもらった。また、その情報の保護と管理には万全を期し、調査対象者に危惧の念を抱かせないように留意した。

調査時期は2008年6月であり、授業終了後、学生にアンケート用紙（記名式）を配布し、1週間後までを提出期限とした。また、アンケート用紙の回収は設置した回収箱を用いた。回収率、及び有効回答率は100%であった。

2) 分析方法

神蔵ら⁴⁾は、235園ある保育実習先の各保育者に「保育者に求められる生活技術」というアンケート調査を行い、その中から「食に関する生活技術」13項目（箸・茶碗の持ち方、料理ができる、食に関する知識、偏食の改善、食事のマナー、盛り付け、姿勢・食べ方、配膳の仕方、調理器具の扱い方、食生活習慣、準備・片付け、短時間での食事、雰囲気作り）を分類している。本研究では、回収したアンケート用紙を単語もしくは短い文章で項目化する際に、上述の13項目を用いた。また、項目化は調査者と調査協力者の計2名で行った。

次に、「食に関する生活技術」について、「1年生」「2年生」「保育者」のそれぞれの間は何らかの関係性があるかについて探索的に検証するために、コレスポネンズ分析を行った。なお、「保育者」のデータ分析については、神蔵ら⁴⁾の調査結果を用いた。統計解析は、Microsoft Office Excel 2007を使用した。

3. 結果

「1年生」「2年生」「保育者」それぞれの「食に関する生活技術」の項目数は表1のとおりである。コレスポネンズ分析では、「1年生」「2年生」「保育者」

表1 食に関する生活技術カテゴリーの項目数

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	合計
1年生	45 (17.8%)	55 (21.7%)	32 (12.6%)	9 (3.6%)	14 (5.5%)	6 (2.4%)	23 (9.1%)	21 (8.3%)	17 (6.7%)	9 (3.6%)	17 (6.7%)	3 (1.2%)	2 (0.8%)	253
2年生	54 (21.9%)	37 (15.0%)	22 (8.9%)	11 (4.5%)	38 (15.4%)	7 (2.8%)	26 (10.5%)	12 (4.9%)	8 (3.2%)	11 (4.5%)	15 (6.1%)	2 (0.8%)	4 (1.6%)	247
保育者	126 (27.5%)	102 (22.2%)	49 (10.7%)	37 (8.1%)	34 (7.4%)	26 (5.7%)	20 (4.4%)	15 (3.3%)	14 (3.1%)	12 (2.6%)	12 (2.6%)	8 (1.7%)	4 (0.9%)	459
合計	225 (23.5%)	194 (20.2%)	103 (10.7%)	57 (5.9%)	86 (9.0%)	39 (4.1%)	69 (7.2%)	48 (5.0%)	39 (4.1%)	32 (3.3%)	44 (4.6%)	13 (1.4%)	10 (1.0%)	959

A…箸・茶碗の持ち方 B…料理ができる C…食に関する知識 D…偏食の改善 E…食事のマナー F…盛り付け G…姿勢・食べ方 H…配膳の仕方 I…調理器具の扱い方 J…食生活習慣 K…準備・片付け L…短時間での食事 M…雰囲気作り

の3要因に「食に関する生活技術」の13項目を加えて分析を行った。

分析の結果、「1年生」「2年生」「保育者」の3要因と「食に関する生活技術」の13項目の両者それぞれに、第1成分、第2成分が抽出され、各成分に寄与する各項目のカテゴリー・スコアは表2、表3の通りであった。第1成分の固有値は0.0519であり、第2成分の固有値は0.0287であった。また、累積寄与率はそれぞれ64.41%、100%であった。

表2 「1年生」「2年生」「保育者」のカテゴリー・スコア

	第1成分	第2成分
1年生	0.9937	-1.3428
2年生	0.9211	1.4263
保育者	-1.0433	-0.0274

表3 「食に関する生活技術」13項目のカテゴリー・スコア

	第1成分	第2成分
A	-0.7222	0.3451
B	-0.4004	-0.7268
C	0.0399	-0.7416
D	-1.5043	0.2685
E	0.6860	2.3673
F	-1.6569	0.1841
G	1.6503	0.4838
H	1.4882	-1.4144
I	1.0868	-1.7872
J	0.8993	0.6046
K	1.8149	-0.2365
L	-1.1901	-0.6337
M	0.6578	1.7188

まず、「1年生」「2年生」「保育者」の3要因が抽出した成分に与える影響については、「1年生」は第1成分に対してプラス方向に寄与しており、第2成分に対してマイナス方向に寄与していた。「2年生」は第1、第2成分ともにプラス方向に寄与しており、逆に「保育者」は第1、第2成分ともにマイナス方向に寄与していた。

次に、「食に関する生活技術」13項目について、第1成分にプラス方向に寄与していた項目は、「食に関する

知識」「食事のマナー」「姿勢・食べ方」「配膳の仕方」「調理器具の扱い方」「食生活習慣」「準備・片付け」「雰囲気作り」の8項目であった。また、マイナス方向に寄与していたのは、「箸・茶碗の持ち方」「料理ができる」「偏食の改善」「盛り付け」「短時間での食事」の5項目であった。第2成分に関して、プラス方向に寄与していた項目は、「箸・茶碗の持ち方」「偏食の改善」「食事のマナー」「盛り付け」「姿勢・食べ方」「食生活習慣」「雰囲気作り」の7項目であり、その他の「料理ができる」「食に関する生活技術」「配膳の仕方」「調理器具の扱い方」「準備・片付け」「短時間での食事」の6項目がマイナス方向に寄与していた。

以上の分析をもとに、各項目間の関係性を2次元のグラフ上に描くと、図1のようになった。コレスポンデンス分析は、度数から項目間の類似度を距離化してその関係をグラフに描く分析法である⁵⁾。つまり、グラフ上にプロットされた各項目間の距離が近ければ近いほど、項目間の類似性が高くなると判断することができる。このことから、「食に関する生活技術」の13項目は5つのクラスターに大別することが可能である。第1クラスターは「箸・茶碗の持ち方」「偏食の改善」「盛り付け」「短時間での食事」の4項目、第2クラスターは「料理ができる」「食に関する知識」の2項目、第3クラスターは「食事のマナー」「食生活習慣」「雰囲気作り」の3項目、第4クラスターは「姿勢・食べ方」「準備・片付け」の2項目、そして第5クラスターは「配膳の仕方」「調理器具の扱い方」の2項目からなるグループである。また、図1から分かるように、「1年生」は第5クラスターと、「2年生」は第3クラスターと、「保育者」は第1クラスターと距離が近いことが明らかとなった。

4. 考 察

本研究では、コレスポンデンス分析法を用い、保育者に求められる「食に関する生活技術」について、学生と保育者の間に何らかの関係性があるかということを探的に検討した。分析の結果、項目間の距離により、「食に関する生活技術」の13項目は5つのクラスターに集約された。それぞれのクラスター、及び項目の内容から、保育者自身の外的行動の側面と内的側面として見ていくと、第1、第4クラスターは実際の保育の中で行われる保育者の外的行動の側面を表し、第2、第3および第5クラスターは保育者自身の食にかかわる知識や資質を重視する内的側面を表していることが

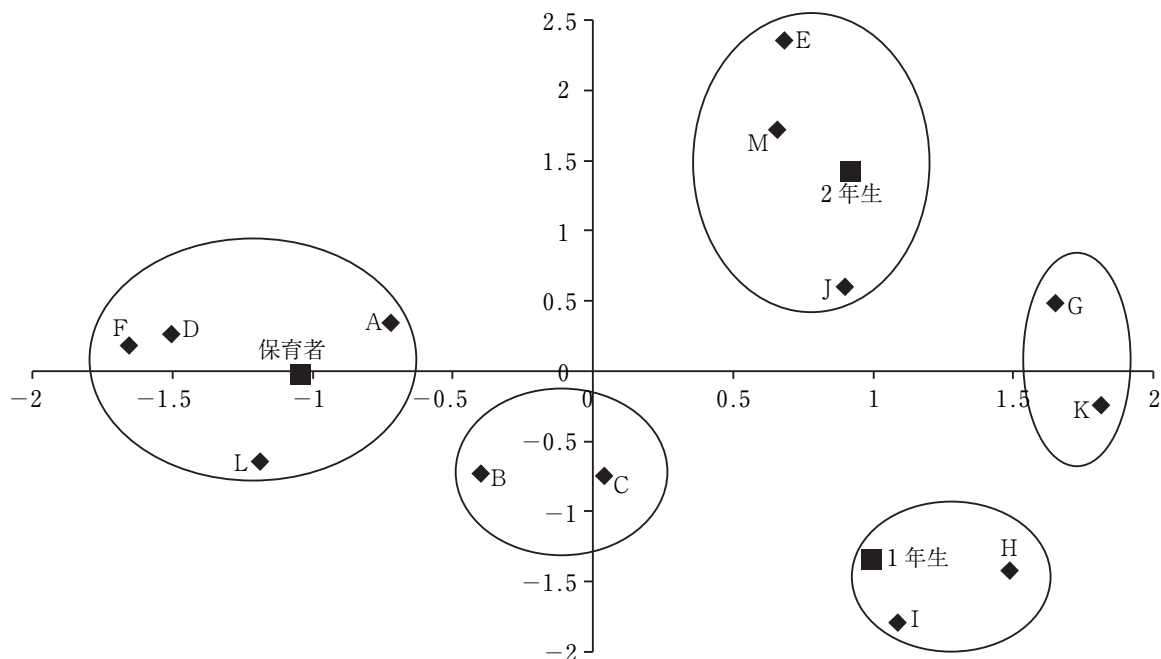


図1 各要因と各項目の内部構造

A…箸・茶碗の持ち方 B…料理ができる C…食に関する知識 D…偏食の改善 E…食事のマナー F…盛り付け G…姿勢・食べ方 H…配膳の仕方 I…調理器具の扱い方 J…食生活習慣 K…準備・片付け L…短時間での食事 M…雰囲気作り

分かる。言い換えれば、前者は子どもにとって保育者の直接的、積極的な指導となって現れるものであり、後者はあくまで保育者の子どもに対する間接的な働きかけであり、保育者としての自己研鑽として存在するものなのである。さらに、このグラフから、「保育者」は第1クラスターに属する、子どもに対する具体的な食に関する外的行動の意識を重要視するのに対して、「1年生」は第5クラスターに、「2年生」は第3クラスターに属する、食にかかわる自らの見識や資質といった内的側面を重視する傾向が強いという実態が明らかとなった。また、第2クラスターは図1の2次元上のグラフの原点近くに位置するため、「保育者」「学生（1年生・2年生）」の両者が重要視していることが分かった。

以上の分析により、明らかになったことは次の3点に集約される。(1)保育者に求められる「食に関する生活技術」についての調査によって明らかとなった、食についての意識は「保育者」と「学生（1年生・2年生）」との間でズレがあること。(2)「保育者」は、子どもに対する具体的な食に関する外的行動の意識を重要視していること。(3)「学生（1年生・2年生）」は、食にかかわる自分自身の知識や資質といった内的側面を重視する傾向があること、である。

保育者を養成する立場からこの調査結果を概観すると、食にかかわる資質や技能について、保育士を目指す学生に身につけさせるべき事項が多いことに気付く。また、本研究により、「食に関する生活技術」の一つ一つの項目が子どもに働きかける外的行動と、食にかかわる自らの見識や資質といった内的側面の2つに大別可能であることが明らかとなった。「食に関する生活技術」について、どちらかが重要であるのではなく、両者が重要であることは言うまでもない。一方で、「食に関する生活技術」の獲得の順序性を考慮した場合、まずは自らの食に対する知識・態度を身に付け、それらを高めていくことを前提として、他者（子ども）への食行動の指導が可能になっていくと考えられる。したがって、食に対する自らの見識や資質といった内的側面を重要視する学生の現状を否定するのではなく、むしろ肯定しながら、子どもに対する保育者の具体的な食に関する働きかけといった、外的行動の側面を意識させていくことが重要であると言えよう。保育の実際にできる限り近づけていくことを目標としつつ、具体的な指導内容や指導方法の検討については今後の課題としたい。

5. 文 献

- 1) 笠原悦夫：子どもがかかる生活習慣病，児童心理58(12)：88—92, 2003.
- 2) 文部科学省：幼稚園教育要領：2008.
- 3) 厚生労働省：保育所保育指針：2008.
- 4) 神蔵幸子，金元あゆみ：保育士に求められる生活技術，洗足論叢36：169—179, 2007.
- 5) Greenacre M：Correspondence analysis in the social science, Greenacre MJ and Blasius J(eds), London：academic press, pp. 3—22, 1994.

